

使徒の働き18章1～17節

説教:わたしの民がいる

はじめに

パウロは地中海沿岸の都市を巡りながら、ユダヤ人と異邦人にイエス・キリストの福音を語りました。そのなかで激しい迫害に何度もあい、まるで石をもって追われるごとく、闇夜に隠れながら次の町に逃れていく繰り返しです。やがてパウロはギリシャのアテネにやって来ます。その町では救われる人たちもいたのですが、多くの人たちはパウロが死者の復活のことを語り出すと、鼻で笑ってそれ以上聞こうとしない。まことに苦労は多くても収穫は数えるほど。そんな伝道旅行です。

パウロはそのアテネの町を去り、そこから西へおよそ50キロほど離れているコリントへ行きます。このコリントにも救われる人たちが起こされ、やがて教会が建てられていきます。後になってパウロが「コリント人への手紙」というタイトルで手紙を書き送るほどの大切な教会に育って行く。でも最初から順調であったのではない。大変な苦労があった。そこに神のどんな助けがあったのか。そのことを見てまいります。

1 パウロ

1) 伝道とユダヤ人からの反抗

パウロは一人でコリントにやって来ました。今なら母教会や宣教団体から支援を受けて宣教活動をするのですが、当時そういうシステムはない。働かなければならない。そこでアキラとプリスキラという夫婦と出会い、二人の家に住み込みで仕事をすることにします。3節で「彼の職業は天幕作りであった」と書かれています。ユダヤ人の律法には、ラビになる者は自分で生活できるように手に職をつけるようにと命令があったのだそうです。それでパウロもこういうことができた。彼は、シラスとテモテがやってくるまで天幕作りをして働き、安息日になれば会堂に行つてイエス・キリストを伝えていました。

ところがここでもまたユダヤ人からの攻撃を受け、口汚くののしられてしまう。これに対してパウロはこう言い返す。「あなたがたの血は、あなたがたの頭上に降りかかれ。私には責任がない。今から私は異邦人のところに行く。」これだけ読むと、パウロは何を言われてもめげず、はね返していくタフな人と印象を持ちます。この後、会堂司クリスポとその家族が救われ多くのコリント人も信じ

てバプテスマを受ける。パウロは勇敢に伝道していった、そう思いたくなります。

2) 弱く、恐れおののく

であれば、どうして主が幻に現れ、9節のようなことを言われるのでしょうか。「恐れないうで、語り続けなさい。黙ってはいけない。」パウロはこのときにか恐れていたようです。ブルドーザーのように前に進むパウロの姿とあまりにも落差があつてにわかに信じがたい。真実はどうなのか。コリント人への手紙第一2章3節にはこう書いています。「あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。」謙遜でこう言っているのではない。おそらく本当だったと思います。もう一度思い起こしてください。パウロはどんなところを通ってきたか。あるときは無実の罪で訴えられ、鞭で打たれて牢に投げ込まれました。あるときはテロリストであると訴えられ、町のならず者に襲われる。なんとか逃げたはいいけれど、自分のをかまってくれた家族がこんどはひどい目にあつてしまいます。石打の刑に処せられ、危うく死にかけたことがありました。ある研究者は、そのときの傷がずっと残っていてパウロはそれで苦しんでいたのではないかと言う人もいます。精神的にもだんだん落ち込み、肉体的にも傷が痛む。さすがのパウロも燃え尽きてしまい何もできなくなるころまで追い込まれていた。

2 神の働き

1) 幻の中で

そんなパウロに主はこう語ります。9, 10節。「恐れないうで、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲つて危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

鬱的になっている人に「がんばりなさい」ということばをかけてはいけないとよく言われます。主はどうされたか。「すこし休みなさい」ではなくて、お尻をたたいて前に進めと言われる。なんと理不尽な神なのかと思うでしょう。しかしこう続きます。「わたしがあなたとともにいるので。」パウロ一人でがんばってやれというのではない。主もパウロと一緒にられるから、だから語り続けなさい。これは神だから言えることであつて、私たちが真似することはできません。

とにかくこのことばを聞いてパウロは一年六ヶ月の間、腰を据えてコリントで教える決心をしました。そこまではよい。問題は、この後何が起きたか、です。12節後半。「ユダヤ人たちは一斉にパウロに反抗して立ち上がり、彼を法廷に引いて行って、『この人は、律法に反するやり方で神を拝むよう、人々をそそのかしています』と言った。」主は、「あなたを襲って危害を加える者はいない」と約束されたはずなのに、どうしてこのようなことが起こるのか。神のことばはどうなったのか。そんな疑問がわいていきます。

2) 地方総督ガリオ

これはよく考えなければならない。もしここで神が語ったことがそのとおりにならなかったと言うのなら、聖書全体を信じることはできなくなります。神は約束を破るはずはありません。神はパウロとともにおられるはず。いったいどこにおられるのか。14節の最初の所を読みます。「パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かって言った。」パウロは弁明しようと口を開こうとしました。ところがガリオはパウロが語らせないで、さっさと結論を出します。ひとことで言えばこうです。「あなたがたが問題にしている律法のことばで訴えようとしても私は関わりたくない。さっさと帰らなさい。」そうやって法廷から追い出された。

パウロは法廷で自分を守るために弁明する必要はありませんでした。法廷に引っぱり行かれたけれど、結果としてみれば何も危害を加えられることはなかった。ガリオにしてみれば、こんなことで自分の将来の出世を棒に振りたくない。そういう思いからユダヤ人たちを法廷から追い出した。神はそのようなガリオの自己中心的な思いも用いて、パウロに危害が及ばないようにしてくださったのです。

3) 会堂司ソステネ

でもそれだけでは皆さんは納得しないでしょう。17節にこうあるからです。「そこで皆は会堂司ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。」会堂司ソステネとは何者なのか。調べてみると、8節に出て来る会堂司クリスポのもとで働いていた仲間であったと言われます。クリスポとその家族全員は救われてバプテスマを受けました。そうすると会堂の管理人は続けられない。辞めることになった。それでソステネが代わりに会堂司になった。ですから彼はクリスチャンではなかった。

そのソステネを、ユダヤ人たちが打ちたたいていく。どうしてか。パウロを会堂に入れたのはだれだ、ということなのでしょう。会堂司がパウロを会堂に入れた。その責任を問われて打ちたたかれてしまった。多くの学者がそんなふうに考えています。

とにかくパウロの身に危害は及ばなかったわけですから、確かに主の約束は果たされたことになる。でも私たちは思うわけです。パウロは守られたとして、ではソステネはどうなのか。ソステネはパウロのせいで責任をとらされてひどい目にあう。それでいいのか。なんとなく納得できません

3 わたしの民がたくさんいる

1) ソステネが救われる

ソステネはその後どうなったのでしょうか。コリント人への手紙第一1章1節の書き出しにこうあります。「神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、コリントにある神の教会へ。」ここにソステネの名前が出て来ます。18節のソステネと同じ人であるかはすこし議論がありますが、ソステネはどこにでもあるような名前ではなかったそうですから、同一人物だと考えていいと思います。

普通なら、ユダヤ人たちからひどい目にあわされれば、だれでもパウロを恨むところです。ところがソステネは恨まなかった。いやむしろ、パウロが語ったイエス・キリストの福音を信じ、パウロとともに伝道する宣教師になっていったようなのです。どうしてそうなるのか。

おそらく彼は二つのことを見ていたのではないかと思うのです。ひとつは、顔を紅潮させ、怒鳴りながら暴力を振るってくるユダヤ人たち。彼らのうちに神がおられるのか、それを見ていた。そしてもうひとつは、ユダヤ人から脅迫を受けながらもひるまずに、しかし静かに語るパウロです。そのパウロの側に神がおられるのか。彼はじっと見ていた。

先輩であった会堂司クリスポがクリスチャンになると聞いたときは驚いたでしょう。なぜパウロの話の信じるのかわからない。自分は関係ないと思いついていた。けれど、いまはつきりとわかる。神はどちらにおられるのか。パウロの側におられる。それで彼は会堂司を辞めて、クリスチャンになる。いやそれだけではない。自分を救ってくれたイエス・キリストを伝える者になっていきました。

2) わたしの民を救うために

神は約束どおりにしてくださいました。「わたしがあなたとともにいる。」パウロだけがわかるのではない。ほかの人にも、霊の目が開かれたときパウロのそばに神がおられるのがわかりました。

神はパウロにこうも語っていました。「わたしの民がたくさんいるのだから。」どんな形であっても、一人でも多くの人たちを救いたいのです。ソステネもわたしの民の一人に数えられていました。パウロが訴えられ、法廷に引かれていったときは、神の約束はどうしたのかと叫びたくなかったかも知れない。でも後から振り返れば、この事件があったからソステネは信仰者になれたわけです。このことも御心であったと納得できる。それが神の導きだったのです。

私たちの歩みも同じでしょう。目の前のことだけを見れば、どこに神の約束があるのかと疑ってしまう。しかし、神が語られたことは絶対に曲げられることはない。驚く方法で、約束されたことを成し遂げていく。そのような神に導かれてまた歩んでまいります。